

藍から生まれる自由な線と面

聴き手

工房藍プロデューサー

北郷 知子



「藍」との出会い、30才になる前後に妻・藍子の父の法事で徳島を訪れた時の事である。

義父は、太平洋戦争で戦死してしまうのだが、子供が母親の胎内にいる時に、戦地から女の子だった「藍子」と命名するよう手紙を送っていた。

その父親の運命に引き寄せられるかのように、その場面は訪れた。

藍の本場徳島で、1枚の藍染の布に出会うのである。

田中はその色の不思議に惹かれ、自分の思い描く造形の世界を藍で表現してみたいと熱望し、10年の間に準備を重ね、1988年に八ヶ岳の麓に「工房藍」を設立したのであった。

40年以上の間、ひたすらに日々を藍と向き合い、独自のアートの世界を構築しながら現在に至る。

——田中先生の作品が他の藍染とは違うと思う点は何ですか？

藍染というと、一般的には民芸的なものがイメージされますが、田中の作品は藍を使った抽象画、絞りを駆使したアブストラクトアートなのです。その殆どは縫い絞りで染められており、型染や臍縷（ろうけつ）染は用いていません。定型に縛られることなく、色々なテーマを独自の縫い絞りで表現している、おそらくこの様なアブストラクトの藍染作品を創作・作成しているのは、日本では田中だけであろうと私は思っています。

そして、田中が建てる藍の色。天然灰汁発酵建てにこだわって創って来た田中作品の藍の色は、観る人の心を一瞬で捉えます。

造形の美しさを藍で表現するーその潔さが際立っていると、田中作品を見る度に感じるのです。

——藍染自体の良いと思われる点は何ですか？

天然灰汁発酵建て、これが田中が染めている藍の染色方法で、化学物質を一切用いていません。

蓼（たで）を発酵させて作る染（すくも）という藍の原料に、灰汁、ふすま、日本酒等を加えて発酵させたものが藍の染液となります。藍は繊維を強くし、防菌防虫の効果はデーターの裏付けもあり、昔は藍染の手甲脚半は虫除け、腰巻きは虱避けなどと言われ、他にも様々な効能があると言われています。

そして、染め終わった後の廃液ですら畑の肥料になる等、藍は無駄な部分が一切無いのです。

そして、最大の魅力は「色」。

田中はよく、藍の色は日本人のDNAに組み込まれていると話します。「藍48色」と言われる様に、極々薄い色から黒に近い濃色まで、藍はそれ自身の

姿形を変えて観る人を魅了します。それらの変幻自在な藍の色は、私たちの眼と心を癒してくるのです。

——田中先生は、どんな想いで作品に取り組んでおられるのですか？

田中は24時間：夜寝ている時にできえ藍染の事を考えていると言います。時には新しい図案の夢を見て、飛び起きて紙に描き付ける事もあるそうです。

「僕は美しいものしか好まない」その田中の言葉通り、物を観る目、日々の暮らし、生き方に、その姿勢は投影されています。

そうやって田中の内部で形作られていく造形の美しさ、それを引き出してくれるのが藍なのです。

藍は単色でありながら、色を重ねる事で実に複雑な色を創り上げる、その色の不思議に出逢って初めて、田中の創造の世界は形を現して行くことになったのです。

「僕の創造の世界は藍でなければ表現出来ない」

その想いで藍と40年以上向き合ってきました。藍と田中の共同創作は現在も進行中です。

——田中先生にとつての自然療法とは何ですか？

田中は49歳の時に大腸ガンを発症し、そのあと25年の間に10回に渡る手術を繰り返しながらも、80歳の現在も日々創作にいきしんでいます。文字通りガンサバイバーと言えましょう。ただ、昭和17年生まれの彼にとつて、自然療法と言う世界は正直馴染みのない世界であつたでしょうし、その世代の多くは病気になるれば病院に行くのが当たり前だったと思います。

でも、その病気を遠ざけた最たるものは彼にとつては藍染だったのです。80を越えた今も創作の意欲に溢れ、創りたいアイディアがフツフツと湧いてくると語る田中。

「藍に出会い藍染で自分の世界を創る、好きな事に没頭出来て、僕は本当に幸せだと思う。現在も創ることが楽しくてたまらない」そうやって目を輝かせる田中にとつての自然療法とは、自分が生涯をかけて打ち込める世界と出逢い、そこに専心し、楽しく想像・創造の羽根を拡げること、自分の人生を豊かに幸せにしている、そう言う事だと思います。

私たちは死ぬ。誰もがいざれ必ず死ぬ。

その現実に早々に自分ごととして向き合わざるを得なかった田中にとって、

Profile 田中賢二 Kenji Tanaka



1942年生まれ
グラフィックデザイナーとして活躍している時に妻藍子の故郷である徳島で藍と運命的な出会いを果たす。
1988年に全ての仕事を整理して、妻と2人で小淵沢に移住し、40年以上の長きに渡り、ひたすらに藍と向き合い現在に至る。
独自の世界観とスタイルは、ドイツやイタリアの個展で高く評価される。国内では、定期的に開催される個展に足を運ぶ根強いファンが多数いる。80歳になった今も、創作意欲が今一番湧いていると仰っている。